

大規模有機農業への挑戦



(有) ファーム・イン・ビレッジ

将来を見据えた農業を

「次の世代へと続いていく農業を目指す」そう語るのは、天童市蔵増地区で稲作を中心とした農業を経営する『有限会社ファーム・イン・ビレッジ』代表取締役社長の森谷茂伸さんだ。

会社組織による農業が全国的にもまだ少なかった平成8年に会社を設立し、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農法である有機農業への取り組みを一貫して行ってきた。

会社設立の背景には、農業の担い手を地域で育てていかなければならないという想いと、地域で農業を続けていく体制づくりのためには、垣根を越えた異業種からの新たな参入も必要と考えたから、と語る。森谷さん自身も、異分野から農業に飛び込んだ一人なのだ。

更生堰地区の整備を機に

会社の主な営農フィールドである天童市蔵増地区では、平成25年から令和3年にかけて、県営更生堰地区ほ場整備事業が行われた。この事業を機に、大きな田んぼを少ない人数で管理する農業の実現のため、大型機械の導入にも積極的に取り組んでいる。



完成後の更生堰地区 77.9ha の農地の整備を行った

売り先があつてこそその有機農業

『そもそも、私が小さいころは、みな有機農業だったから、これが当たり前だと思っています。現在、約5 haが有機農業ですが、他の30 haと同じくらい労力がかかります。営農面積を広げた、ということでは農業は続きません。売り先を見据えた上で栽培面積を考えていく必要があります。会社を生産部門と販売部門に分け、販売ルートを確認し連携しながらやっていく、これが大事だと考えています。』



最新の除草機、前側の爪で起こし、浮いた雑草を取る



代表 森谷 茂伸さん

有機農業では除草剤の使用制限があり、雑草との戦いであるという。薬剤に頼らず大きな面積を除草するため、最新の除草機を導入した。ほ場整備で区画が大きくなり、農地が集められたことにより、こういった機械に投資するメリットが生まれたという。除草機械とは場整備は、大規模有機農業に取り組むうえで必須であると、森谷さんは話していた。

持続可能な社会を目指す取組の1つとして、環境に優しい農業は大きく注目されている。森谷さんが40年間取り組んできた次代へ続く農業の仕組みづくりは、まさにこれからの農業の姿を現す先進的な活動となっている。

会社の生産部門を支える農場長



五十嵐 晋さん

北海道出身。
農薬販売会社を経て、平成30年に入社。最新の農業機械を使いこなす頼もしい存在。今後はスマート農業などオートメーション化に取り組みきたいと語る。



特別栽培米
『もりやくんちのこだわり米』

お問い合わせ先：(有) ファーム・イン・ビレッジ TEL 023-653-1388

<http://www.moriya-rice.com>

事業内容：お米の生産、販売、作業受託、乾燥調整、加工